

令和 3 年 4 月 12 日

海外特別研究員最終報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

採用年度 2019

受付番号 201960568

氏名

古本真

(氏名は必ず自署すること)

海外特別研究員としての派遣期間を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。

なお、下記及び別紙記載の内容については相違ありません。

記

1. 用務地（派遣先国名）用務地： エセックス大学 （国名： 英国）

2. 研究課題名（和文）※研究課題名は申請時のものと変わらないように記載すること。

ザンジバルにおけるスワヒリ語南部諸方言の記述的研究

3. 派遣期間： 平成 31 年 4 月 8 日 ~ 令和 3 年 3 月 14 日

4. 受入機関名及び部局名

受入機関名： エセックス大学

部局名： 言語学科 (Department of Language and Linguistics)

5. 所期の目的の遂行状況及び成果…書式任意 **書式任意 (A4 判相当 3 ページ以上、英語で記入も可)**

(研究・調査実施状況及びその成果の発表・関係学会への参加状況等)

(注)「6. 研究発表」以降については様式 10-別紙 1~4 に記入の上、併せて提出すること。

新型コロナウイルス感染症流行の影響により、計画していたフィールド調査を満足に行うことはできなかった。また、参加を予定していた学会も延期されたり中止されている。派遣期間の後半は、こうした難しい状況にあったものの、研究会発表を二度行い、研究論文を 2 本、言語資料を 2 本を成果として出すことができた。以下では、研究の遂行状況及び成果についての報告としてまずこれらについて具体的に紹介する。また、現在執筆中の論文や、採択されている次年度の学会発表があるが、そうしたものについても合わせて紹介する。

論文 ‘Come to the future, come to the past: Grammaticalisation of Kimakunduchi COME’

本申請研究の対象のひとつであるスワヒリ語マクンドゥチ方言では、「来る」を意味する動詞-ja が、未来、あるいは過去を表す標識として機能する場合がある。「来る」などの移動動詞から、未来ないしは過去を表す標識への変化（文法化）は、スワヒリ語と系統的に近い関係にあるバントゥ諸語のみならず、世界中の言語で観察されるが、未来と過去のどちらも表すようになっている事例は極めてまれである。オランダのライデンで 2019 年に開催された学会 The 49th Colloquium on African Languages and Linguistics では、マクンドゥチ方言の-ja のこうした機能的特徴を紹介し、-ja が段階的な機能の変化を経ている可能性を指摘した。そして、この現象に関してデータを追加し、考察を深め執筆した論文“Come to the future, come to the past: Grammaticalisation of Kimakunduchi COME”は、アフリカ言語学の代表的なジャーナルの一つである査読誌 *Africana Linguistica* に掲載された。以下で、その論旨を簡単に紹介する。

この論文では、まず、-ja がほかの動詞と連続した場合、未来と過去の標示に関与することを、否定証拠を交えながら実証的に示した。そして、-ja が完結形に活用した場合に過去が表される一方で、それ以外のほとんどの活用形では未来が表されること、未来と過去の標示には、参照時の移動が伴うことに着目して、未来の標示に関わる-ja と、過去の標示に関わる-ja が、同じ通時的プロセスの異なる段階にあるという仮説を提示した。この仮説では、まず移動を表す動詞-ja が、通言語的な変化の傾向に沿った形で未来の標識に変化したとされる。そして、そのあとで、未来標識の-ja が参照時を発話時以外にシフトさせる標識と再解釈された結果、完結標識と協力しながら過去を表すようになったというわけである。完結標識はその名のとおり完結相を表すが、-ja と共起する場合は未完結相を表す助動詞を形成しうる。この助動詞は件の変化プロセスの最終段階に位置づけられる。

この論文のメインテーマは、あくまでマクンドゥチ方言の動詞-ja だが、議論は他の言語や通言語的な立場からの研究も参照しながら構成されている。そのため、この論文は、マクンドゥチ方言の記述研究を発展させるだけでなく、移動動詞から時制標識への変化に関する類型論的な仮説に一石を投じている。例えば、移動動詞が未来標識へと変化する際は、未完結標識を伴うと言われているが、マクンドゥチ方言の記述からは、未完結標識は、移動動詞から未来標識への変化にとって必須のものではなく、むしろ変化の妨げとならないために、移動動詞由来の未来標識に付随しがちであるということが示唆される。

論文 ‘Does Kimakunduchi have stress and tone? Prosody in Kimakunduchi’

標準語をはじめとするスワヒリ語の諸方言のほとんどは、多くのバントゥ系言語と異なり、弁別的な声調をもたない。スワヒリ語マクンドゥチ方言は、標準語をはじめとするほかのスワヒリ語の諸方言と明らかに異なる音調をもつ。いくつかの先行研究は、マクンドゥチ方言が、多くのバントゥ系言語と同様に声調をもつと記述しているが、そうした記述に懐疑的な立場の説明も散見される。論文 ‘Does Kimakunduchi have stress and tone? Prosody in Kimakunduchi’ では、まず、上記の通り、マクンドゥチ方言の音調の基本的なことですら、コンセンサスがない状況にあることを紹介した。そのうえで、ストレスと呼ばれる語や句

の次末音節に現れる境界音調に着目しながら議論を展開した。具体的には、申請者がフィールドで集めたマクンドゥチ方言と標準スワヒリ語の音声データに、共著者である神戸大学の高橋康徳博士が、音響分析や統計分析を施し、標準語では、長さや高さといったストレスの存在を示唆する次末音節の音声的卓立がみられる一方、マクンドゥチ方言ではそうしたものがみられないことを明らかにした。マクンドゥチ方言が次末音節のストレスを欠いているという主張は、形態論的な事実からも裏付けられる。例えば、標準語において、語幹部分が一音節となる 9/10 クラス名詞の接頭辞は成節的な鼻音だが、対応するマクンドゥチ方言の名詞はこうした成節的な鼻音を伴わない。先行研究では、9/10 クラス名詞についている接頭辞の成節性は、ストレスがあるために生じていると説明されている。この見方に則った場合、マクンドゥチ方言がストレスを欠いていると仮定することで、マクンドゥチ方言の一音節語幹の 9/10 クラス名詞の接頭辞が非成節的であるという事実は説明することができる。また、標準語の一音節語幹動詞の命令形には、ku-という無意味形態が付随するが、マクンドゥチ方言の対応する一音節語幹動詞の命令形はこの ku-を欠いている。ku-は、不定形接頭辞に由来し、ストレスがおかれているために保持されていると一般に考えられているが、この仮説を受け入れるのであれば、マクンドゥチ方言にはストレスがないために、この ku-が脱落していると考えることができる。まとめると、他のスワヒリ語とマクンドゥチ方言の音調の違いは、声調の有無に帰することはできないが、ストレスの有無に関連しているということができる。

言語資料「スワヒリ語トゥンバトゥ方言の談話資料―炒められたマカメの冒険―」

トゥンバトゥ方言は、主にタンザニア連合共和国・ザンジバル自治州、ウングジャ島の北に位置する小島、トゥンバトゥ島で話されるスワヒリ語の地域変種である。言語資料「スワヒリ語トゥンバトゥ方言の談話資料―炒められたマカメの冒険―」では、ジョンゴウエと呼ばれる地区で話される民話を書き起こして公開した。トゥンバトゥ方言の資料というのはそもそも数が少ないが、なかでもジョンゴウエの資料というのは、管見の限り存在しない。こうした希少性に加えて、いくつかの特筆すべき文法現象がみられることもこの資料の意義の一つとしてあげられる。例えば、この民話内では、完結相の標示に異なる二つの活用が用いられている。一方がゴマニとよばれるトゥンバトゥ島内の別の地域でも用いられるもの、一方がペンバ方言で見られるものであることが申請者自身によるフィールド調査から分かっているが、このことを考慮すると、二つの異なる標示法は、スワヒリ語の方言（話者）同士の接触が生じている可能性が指摘できる。こうした可能性については、2019 年 11 月にマインツで開催されたワークショップでも言及しており、スワヒリ語方言学に新たな展開をもたらす研究テーマとなることが期待される。

言語資料 ‘Sesotho (S33)’

言語資料 ‘Sesotho (S33)’ では、SOAS の研究プロジェクト “Morphosyntactic Variation in Bantu: Typology, contact and change” (2014-2017) で作成された 142 のパラメータに照らし合わせて、南部バントゥ諸語の一つであるソト語の形態統語特徴の記述を行った。本申請研究課題でも、このパラメータを参考にしながら、スワヒリ語の南部諸方言を対象させることも目的の一つとしている。この言語資料作成に携わることで、142 のパラメータに対する理解がさらに深まった。また、ソト語というスワヒリ語以外の言語を観察することにより、通バントゥ的な視座を獲得することに成功した。これは、次に言及する、現在執筆中の論文でも役立てられている。

論文 ‘Variation in Kimakunduchi and Standard Swahili: insights from morphosyntax’ (執筆中)

本申請研究の集大成として、受入研究者の Hannah Gibson 博士と、論文 ‘Variation in Kimakunduchi and Standard Swahili: insights from morphosyntax’ を執筆中である。この論文は、スワヒリ語の南部諸方言を対照させるという本申請研究の研究目的をまさに体現しているものである。この論文の貢献、ないしは意義として、以下の三点をあげることができる。

1. マクンドゥチ方言の記述のアップデート

マクンドゥチ方言の動詞の中には、他の動詞とは異なる活用体系をもつものがある。先行研究では、こうした動詞は「助動詞」と恣意的に分類されるなどしてきたが、この論文では、それらを欠損動詞として再定義しなおしたうえで、それぞれの形態統語的特徴を網羅的に記述した。また、多くのバントゥ系言語は、perfect(ive)形で状態をあらわす inchoative 動詞をもつが、マクンドゥチ方言の inchoative 動詞を網羅的に提示することにも成功している。更に、linker と呼ばれる名詞と修飾語をつなぐ機能語の発見もこの論文の貢献といえる。

2. 体系性の違いの記述

言語が記述される際は、それぞれの言語が独立した体系をもつことが前提とされる。これは、方言と呼ばれる変種の記述であってもかわらない。しかしながら、実際の方言の記述では、この体系性の違いがあることが無視されているかのようにみえることがしばしばある。前年度に発表した論文‘*-Mala 'finish' derived perfect(ive) prefixes in Unguja dialects of Swahili’では、先行する事態を表す TAM 体系がマクンドゥチ方言とスワヒリ語の標準変種で異なることを指摘したが、本論文ではそれに加えて、未来や現在を表す動詞の活用体系が異なることを詳述している。

3. 新たな対照の視点

これまで着目されてこなかったが、バントゥ諸語間のマイクロバリエーションを明らかにするうえで、重要な点があることにもこの論文は言及している。例えば、本論文では、マクンドゥチ方言における主語接頭辞の異形態の出現が、否定接頭辞と同様に動詞の定形性と相関していることを記述した。主語接頭辞が複数の異形態をもつというのは、バントゥ諸語ではあり得ることだが（例：ソト語）、それと節タイプとの関連については、管見の限りこれまでのところ十分には論じられていない。

マクンドゥチ方言は、コピュラ動詞由来の関係節標識をもつが、この点も特筆すべきである。バントゥ諸言語の関係節の類型論は、これまでもたびたび論じられてきたが、こうした関係節標識についてはまったく言及がない。しかしながら、個別言語の記述を精査してみると、他のバントゥ系言語でも、マクンドゥチ方言のコピュラ動詞と機能的に類する姿勢動詞やコピュラ動詞が関係節標識として用いられている例が散見される。

標準語とマクンドゥチ方言の未来の標識は表す確実性に違いがあるという記述も新たな対照の視点をもたらしている。バントゥ言語学では、未来の遠近の対立がとりあえげられることが多い一方、確実性というのは十分に考慮されてこなかった。しかし、こうした違いは、未来という事態の性質を考えればあり得ることだし、近年では、遠近の対立として記述されてきた未来の標識が、実は確実性の違いに対応する場合があることも記述されている。

また、恒常的な状態を表す動詞は、マクンドゥチ方言の inchoative verb とみなしうる特徴をもつが、標準スワヒリ語の対応する動詞は inchoative verb ではないという点を明言したことも特筆すべきである。従来は、inchoative verb がバントゥ系言語に共通してみられるという点に注目が集まっていたが、この論文は、どんな動詞が inchoative verb として分類されるのか、さらにはその下位分類が、言語によって異なる可能性を示唆している。

学会発表‘Grammaticalisation of the Kimakunduchi demonstrative into a pronominal topic marker’

2020 年は二度、研究会発表を行った。この二つの発表は、どちらもマクンドゥチ方言の指示詞縮約形をテーマとしている。そこでの議論や分析を深化させたものを、2021 年 4 月にフロリダで開催される、第 51/52 回アフリカ言語学会議で発表する予定である。その論旨は以下の通りである。

マクンドゥチ方言の指示詞には、二音節の基本形に加えて、一音節の縮約形が存在する。この指示詞は、名詞を修飾することではなく、もっぱら主題を照応するために現れる。主題を照応するということは、述語の前の名詞句と同じ対象を指示するという特徴からうかがい知ることができるが、他のテストからもその主張は裏付けられる。指示詞のこうした変化は、通言語的に珍しいようにも思われるが、バントゥ諸言語の動詞をマークする主語接

頭辞や目的語接頭辞も、主題を参照する代名詞だったという仮説を踏まえると、マクンド
ウチ方言の指示詞縮約形も類似の変化のプロセスをたどって発達していると考えられる。